



さくらたより

令和3年度 学校だより
NO. 24
令和4年2月10日発行
山形市立桜田小学校

学年閉鎖中 タブレットを持ち帰っていた5年生は…

コロナウイルス感染拡大の波は、本校にもやってきました。7日（月）～9日（水）、2年生・5年生の学年閉鎖に当たっては、様々ご協力をいただきまして、ありがとうございました。幸い感染の広がりには認められず、本日（10日）から、再開しました。今後も十分な感染対策、子どもたちへの指導を行って参ります。

5年生は、軌道に乗り始めた週末の課題に取り組むため、4日（金）にタブレットを持ち帰っていました。その利点を活かし、学年閉鎖中に担任と子どもたちはどんなやりとりをし、どのようなことを行ったのか、簡単に紹介します。

①保護者の方へ 依頼メール送信

家庭学習としての課題をお知らせし、お子さんに取り組んでもらうように依頼。

②以後は、子どもの個別タブレットへ、担任からの「課題」提示

③子どもたちは、「ラインズeライブラリアドバンス」という“ドリル問題”に取り組む

5教科〔国語・社会・算数・理科・外国語〕

基本・標準・挑戦のコースを選び、自分が選んだ教科、進度に合わせて自分で学習。

問題→答え入力→瞬時に正誤（○×）→次の問題 …

（やったことの全てが記録に残り、自分で進度の確認、苦手分野が把握できる）

④担任は、子どもたちの進捗状況を把握

全員に（個人のタブレット宛）担任から“励ましの言葉”を送信。

取り組みが遅れている子へ（個別宛）担任から“励ましの言葉”を送信。

（*タブレットの電池切れ（充電タイプ）のため、取り組めていないことも想像していました。別の端末があるご家庭は、その端末からもeライブラリに入っていけることも紹介しました。）

概要を紹介してみました。いかがでしょうか。このようなことが、今後は週末ごとに行われていくというイメージでしょうか。（進捗状況は週明け月曜日に把握）

進み具合は全て記録に残り、担任がこれをもとに次の取り組みや新たな授業展開を考え実行していきます。

担任による進捗状況の把握を、窮屈に感じる人もいれば、「先生とつながっている。安心。」と感じる人もいることでしょう。今後、試行錯誤を続けながら、“子どもにとっての最善”を創っていきます。

変わろうとしている学校

GIGAスクール構想により1人1台端末環境が整備されたことで、子どもの学びはどのように変わっていくのか、また授業・教師・学校はどのように変わっていかないといけないのか — これから学校全体が取り組もうとしていることのおおよそを紹介をします。私たち教職員の意識改革の一端でもあります。

1 「共有物」からの脱出 [一人一台の専有物]

以前、パーソナルコンピューターが学校に配置されたときは、「共有物」でした。場所や台数の関係で、使いたいときに使えない現状でした。今は「個人の専有物」です。自分のペースで使えます。高速大容量通信環境ですので、「画像が表示されるまで長い時間待つ」という無駄もありません。

2 「新奇性」からの脱出 [あるのが当たり前]

どんどん使い、物珍しさを脱していきます。タブレットが手元にあることが当たり前という環境。「今、触る時間じゃないよ。手を放して、こっち見て…」 「気をつけるのはね…」 「やっちゃいけないことは…」等の注意時間はもう必要なくなります。ごく当たり前にするのです。

3 「一斉授業だけ」からの脱出 [一斉もあり、タブレットを使った調べ学習や交流等もあり]

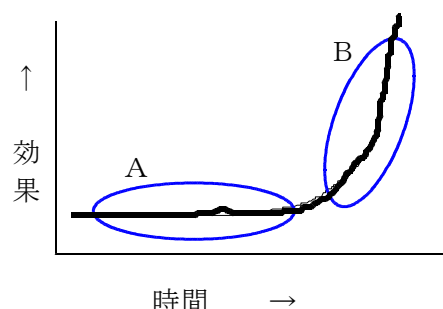
授業を創造する手立てが大幅に広がりました。紙と鉛筆、正面黒板を向いた一斉学習だけではなく、違った授業形態をどんどん広げていくことができます。私たち教職員も「こんなことができるんだ。できそうだと、わくわく感を持ちながら、授業を創る楽しさを試行錯誤していきます。

4 「授業場面だけの使用」からの脱出 [委員会活動でも、学級活動の様々な場面でも]

学校生活全体の中で、日常的に使っていくようになります。児童会委員会活動の中でも使います。朝の会・帰りの会、学級活動でも使います。具体は、これから探りながらです。

5 「即時効果」からの脱出 [使い始めの“今”は、効果がはっきり見えない]

右図の[A]を経ないと、一人一台端末の効果（手書きの実線）がはっきりと分かる[B]に達しないと言われています。[A]の時間がどれだけなのかは分かりません。少なくとも数ヶ月であることは確かです。「何だ、効果はちっとも分からない。今までのやり方でも十分だ」「トラブル発生。だから使わせるのをやめよう」ではなく、「今は即時に効果は見えてこないけど、やがてすごい勢いで効果ははっきり見えてくる」ーこのように考えています。「慣れ」です。「使う練習」ではなく、どんどん使って慣れていくのです。



6 「対面授業だけ」からの脱出 [何を再構築していくか、何は変えたくないのか、見極め]

このコロナ禍で、私たち教職員の“研修”も変わりました。集合ではなく、オンラインでの研修です。講義を聴くという形態では効果抜群です。今後も内容によっては主流となっていくことでしょう。学校の授業はどうでしょうか。対面だからこそ効果があがること、仲間とのやりとりの中で育まれるもの、対面でなくてもいいもの、これらを見極め、使い分けながら授業を創っていく必要があると考えています。

7 「ツール（道具）の固定化」からの脱出 [適切なツールを選択する]

教科書（今までの）・デジタル教科書（まだ手軽に使う状態ではない）・資料（紙）・資料（インターネット上）・ドリル（紙）・ドリル（冒頭で紹介したeライブラリ等）・画用紙や模造紙・プレゼンテーションソフトなどなど、選択の幅はぐんと広がっています。どれを使うかの選択は、今のところ、場面に応じて教師がやっていますが、やがて子ども自身が選択できるようにしていきます。

（参考：放送大学 中川一史氏 GIGAスクール構想 7つの「脱」）